

# 黒ぶだう

宮沢賢治

青空文庫



仔牛が厭あきて頭をぶらぶら振つてゐましたら向ふの丘の上を通りかかった赤あかぎつね狐が風のやうに走つて来ました。

「おい、散歩に出ようぢやないか。僕がこの柵さくを持ちあげてゐるから早くぐつておしまひ。」

仔牛は云いはれた通りまづ前まへ肢を折つて生え出したばかりの角を大事にくぐしそれから後肢をちゞめて首尾よく柵を抜けました。二人は林の方へ行きました。

狐が青ぞらを見ては何べんもタンと舌を鳴らしました。

そして二人は樺林かばの中のベチュラ公爵の別荘の前を通りました。

ところが別荘の中はしいんとして煙突からはいつものコルク抜きのような煙も出ず鉄の垣かきが行儀よくみちに影法師を落してゐるだけで中には誰たれも居ないやうでした。

そこで狐がタン、タンと二つ舌を鳴らしてしばらく立ちどまってから云ひました。

「おい、ちよつとはひつて見ようぢやないか。大丈夫なやうだから。」

犢こつしはこはさうに建物を見ながら云ひました。

「あすこの窓に誰かゐるぢやないの。」

「どれ、何だい、びくびくするな。あれは公爵のセロだよ。だまってついておいで。」  
「こはいなあ、僕は。」

「いゝつたら、おまへはぐづだねえ。」

赤狐はさつさと中へ入りました。仔牛も仕方なくついて行きました。ひひらぎの植込みの処ところを通るとき狐の子は又青ぞらを見上げてタンと一つ舌を鳴らしました。仔牛はどきつとしました。

赤狐はわき玄関の扉とのところでちよつとマットに足をふいてそれからさつさと段をあがつて家の中に入りました。仔牛もびくびくしながらその通りしました。

「おい、お前の足はどうしてさうがたがた鳴るんだい。」赤狐は振り返って顔をしかめて仔牛をおどしました。仔牛ははつとして頸くびをちぢめながら、なあに僕は一向家の中へなんど入りたくないんだが、と思ひました。

「この室へやへはひつて見よう。おい。誰か居たら遁にげ出すんだよ。」赤狐は身構へしながら扉をあけました。

「何だい。こゝは書物ばかりだい。面白くないや。」狐は扉をしめながら云ひました。支し那なの地理のこゝを書いた本なら見たいなあと仔牛は思ひましたがもう狐がさつさと廊下を

行くもんですから仕方なく又ついでに行きました。

「どうしておまへの足はさうがたがた鳴るんだい。第一やかましいや。僕のやうにそつとあるけないのかい。」

狐が又次の室をあけようとしてふり向いて云ひました。

仔牛はどうもうまく行かないといふやうに頭をふりながらまたどこか、なあに僕は人の家の中なんぞ入りたくないんだ、と思ひました。

「何だい、この室はきものばかりだい。見つともないや。」

赤あかぎつね狐は扉をしめて云ひました。僕はあるのいつか公爵の子供が着て居た赤い上着なら

見たいなあと仔牛は思ひましたけれどももう狐がぐんぐん向ふへ行くもんですから仕方なくついでに行きました。

狐はだまって今度は真しんちゆう鍬くわのてすりのついた立派なはしごをのぼりはじめました。どうして狐さんはあゝうまくのぼるんだらうと仔牛は思ひました。

「やかましいねえ、お前の足つたら、何て無器用なんだらう。」狐はこはい眼めをして指で仔牛をおどしました。

はしご段をのぼりましたら一つの室があけはなしてありました。日が一ぱいに射さして絨じ

緞ゆうたんの花のもやうが燃えるやうに見えました。てかてかした円卓まるテーブルの上にまつ白な皿さらがあつてその上に立派な二房の黒ぶだうが置いてありました。冷たさうな影法師までちゃんと添へてあつたのです。

「さあ、喰べよう。」狐はそれを取つてちよつと嗅かいで検査するやうにしながら云ひました。

「おい、君もやり給たまへ。蜂蜜はちみつの匂におひもするから。」狐は一つぶべろりとなめてつゆばかり吸つて皮と肉とさねは一しよに絨鍛じゆうたいの上にはきだしました。

「そばの花の匂もするよ。お食べ。」狐は二つぶ目のきよろきよろした青い肉を吐き出して云ひました。

「いゝだらうか。」僕はたべる筈はずがないんだがと仔牛は思ひながら一つぶ口でとりました。「いゝともさ。」狐はプツと五つぶめの肉を吐き出しながら云ひました。

仔牛はコツコツコツと葡萄ぶどうのたねをかみ砕いてゐました。

「うまいだらう。」狐はもう半ぶんばかり食つてゐました。

「うん、大へん、おいしいよ。」仔牛がコツコツ鳴らしながら答へました。

そのとき下の方で

「ではあれはやつぱりあのまんまにして置きませう。」といふ声とステツキのカチツと鳴る音がして誰か<sup>たれ</sup>二三人はしご段をのぼつて来るやうでした。

狐はちよつと眼を円くしてつっ立つて音を聞いてゐましたがいきなり残りの葡萄の房を一ぺんにべろりとなめてそれから一つくるつとまはつてバルコンへ飛び出しひらつと外へ下りてしまひました。仔牛はあわてて室の出口の方へ来ました。

「おや、牛の子が来てるよ。迷つて来たんだね。」せいの高い鼻眼鏡<sup>はなめがね</sup>の公爵が段をあがつて来て云ひました。

「おや、誰か葡萄なぞ食つて床へ種子<sup>たね</sup>をちらしたぞ。」泊りに来て居た友だちのヘルバ伯爵が上着のかくしに手をつつこんで云ひました。

「この牛の仔にリボン結んでやるわ。」伯爵の二番目の女の子がかくしから黄いろのリボンを出しながら云ひました。





# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2007年4月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 黒ぶだう

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>